

◆ 誰かを想い、誰かの幸せを願う ◆



総合開会式での生徒実行委員会委員長の「歓迎のことば」は力強く熱く、そして大変想いのこもったものであった。

“文化部のインターハイ”ともいわれる「全国高等学校総合文化祭（総文祭）」が、感染症対策が徹底されるなか、7月31日から7日間にわたり和歌山県で開催された。昨年の高知総文祭は、Web開催という形で行われたが、今年は現地で皆が一堂に会しての開催である。改めて、これまで何事もなく様々な行事が開催されていたかつての状況のありがたさと思う。

さて、2014年の「いばらき総文祭」でもそうだったけれど、総文祭では、開催2年前に生徒実行委員会が組織される。冒頭に触れた生徒実行委員会委員長を中心に子どもたちの思いのこもった大会運営がなされる。

委員長の前冬磨さんは「芸術文化活動は人を照らす力があり、苦しいこと、悲しいことがあったとき人を救うのはその力であると思う」と語った。この一連の拙稿でも何度か触れた「アートは人類の生命維持装置」とするモニカ・グリュッターズ独文化相の言葉とも共鳴する、まさに「生きる力」に通じるメッセージ。そして、「芸術文化活動を通して、「他者」を笑顔にすることができる。人々の「心」に語りかけることができる」と続ける。

日々、客観的に見れば大変厳しい状況が続いている。しかし、個々人の「心」の置き場所、拠り所によって、そのような状況も見方が変わるのではないか、そんな示唆を与えてくれる問いかけとなったように思う。

最後に「誰かを想い、誰かの幸せを願う、その心を皆さんに届けたい」と力強く結んだ。

会場全体から大きな拍手がわき起こった。

これからもこの厳しい状況が続いていきそうだ。しかし、そんなときだからこそ「誰かを想い、誰かの幸せを願う、その心」の置き場所を大事に育ててもらいたいと強く願う。